

はしがき

世界というシステムは、あまりにも複雑になっている。もはや、何がどうなっているのかを理解することさえ、たやすいことではない。いや、そもそも、世界の全体像が提示されることさえ、少なくなってきた。

いまの学術研究は、精緻さで勝負が決まる仕組みになっている。だから、研究者は「局地戦」に没入しないと、勝負に負けてしまう。世界の全体像をとらえようとする営みは、「局地戦」の対極にあるので、こうした営みは、いまや労多くして割に合わないものとして、半ば放棄されかかっている気がする。

さて、本書は、主に世界経済論や国際経済学を学ぶ、大学生のためのテキストである。このうち世界経済論は、本来、世界の全体像を経済学的な観点からとらえることに、強みのある分野である。ただし、そうした営みが難しくなっているのが、昨今である。このような中で編んだ本書には、次のような特徴をもたせている。

第1に、広い視野にたって、ものごとを示そうとしたことである。これまでの世界経済論や国際経済学のテキストでは、地球環境や生態系、あるいは資源・エネルギーについては、よくいってもつけ足的にしか扱われてこなかった。だが、地球と人類の持続可能性が21世紀の大問題となっている今日、こうしたテキストばかりで良いとは思えない。そこで、本書では、人類が発展と繁栄を求めてこの地球上で営んでいる経済活動を、根底からとらえようと試みることで、わたしたちの生存の前提条件が何であり、それがいまだどのように揺らいでいるのかを、人類史的なスケールで示している。また、先進国に共通する傾向や、今日の途上国と先進国との関係性、さらに途上国地域間の比較と連結を示すことで、各国・地域を全体的にとらえる視角も導入している。『地球経済入門』という本書のタイトルは、何よりもこの第1の特徴に由来している。

第2に、20世紀後半の世界経済の動向、特に事件史的なトピックの扱いを、控え気味にしたことである。これは、本書の主な読者が21世紀生まれであるこ

とや、歴史学の守備範囲がいまや20世紀後半にまで及んでいることを踏まえたものだが、次のような理由にもよっている。

過去数十年、^{あまた}数多の経済事象や事件が、危機や革命や転換点とみなされて、論じられてきた。だが、それらの多くは、もはやテキストでは扱われてさえないか、せいぜい語句が簡単に出てくる程度となり果てている。つまり、新奇性のある経済事象や事件に、いちいち危機だの革命だの転換点だのといった過剰な意味づけをしては、それらをしばし消費したのちキレイさっぱり忘れ去る一方で、生存基盤の揺らぎという地球最大の危機については脇に置く、という構えが続いてきたわけである。はたして、このような構えによって、複雑さを増す世界というシステムを、適切に理解できるようになるのだろうか。こうした問題意識から、本書は、浮かんでは消える^{うたかた}泡沫の経済事象をむやみに追いかけて羅列するよりも、そうした経済事象の根底にあってそれらに通底する論理や構造、あるいは長期的な趨勢を説明することに、むしろ力を入れている。もちろん、歴史的な経緯も述べられてはいるが、それは、こうした目的のためである。

第3に、「人」が見えるようにしたことである。経済学は抽象度が高く、取っつきやすい学問分野とはいえない。とはいえ、経済活動じたいは、生身の人間が織りなすものである。そこで、働き方や所得格差、買い物の仕方や移民の動きなどに注目することで、人の生活から、地球規模の経済活動に興味をもってもらおうと試みた。さらに、一般の人々の生活を苦しめているものを浮き彫りにし、そこに批判的な目を向けることを促してもいる。

第4に、テキストとしての「定番」をおさえてはいるが、単に通説を紹介して済ませるのではなく、ときに通説や俗説に批判的な目を向けたことである。たとえば、石油の枯渇や食料の不足を恐れる見方は誤解であること（第1章）、比較優位を機会費用だけで説明すると重要な論点が抜け落ちること（第3章）、ドルを中心とする国際通貨体制は当面の間続く可能性が高いこと（第6章）、中国での外資導入は改革・開放からしばらくの間は低調だったこと（第10章）、などはその典型であろう。これらは、研究者でも、各領域の専門家ではない限り、必ずしも適切に理解されてこなかった点だと思われる。

ここで、本書の構成を紹介しよう。まず、第Ⅰ部（第1章～第2章）は総論で、ここで地球経済を俯瞰的に論じている。次に、第Ⅱ部（第3章～第8章）は各論で、国際貿易・国際金融・国際開発を2章ずつ扱っている。そして、第Ⅲ部（第9章～第11章）は各国・地域経済論として、米国・中国・EUという主な国・地域を取り上げている。すべての章を、2～3回ずつで学べば、4単位の講義に最適な分量となる。しかし、大学や学部によっては、国際貿易・国際金融・国際開発を2単位の講義で扱うことも多いだろう。そのような場合には、第3章で国際貿易を、第5章で国際金融を、第7章で国際開発を少しずつ学ぶ、といった使い方もできるようにしてある。

法律文化社の小西英央さんに本書の構想を披露してから、このたび本書を世に送り出すまでには、「まさか」のアクシデントが幾つもあって、想定外の年月を要してしまった。この間に、適切な催促と寛容なご対応をいただいた小西さんに、遅れをおわびしつつ、厚くお礼を申し上げる。また、各執筆者の執筆のペースとなる授業を聴いて質問をしてくれたり、各章の草稿を読んでコメントをしてくれた、学生・卒業生の皆さんに、とても感謝している。さらに、各執筆者が知人や勤務先から得た励ましやサポートにも、謝意を申し述べたい。

21世紀に入って早20年、読者の中には、2100年を生きて迎える人が少なからずいる。そのとき、この地球経済は、どうなっているだろうか。それをこの目で確かめることができる者は、本書の執筆者には、いない。教育とは世代を引き継ぐ営みだと思う。読者が22世紀に向かって生きる上で、本書がその導きとなれば、とてもうれしい。

2020年9月 戦後75年

編者

付記：本書で、「東アジア」とある場合、韓国や中国などの狭義の東アジア諸国はもちろんのこと、タイやインドネシアなどの東南アジア諸国も含んでいる。これは、世界銀行の用法にならったものである。